

## 私が本気で打ち込めるもの

京都府立鴨沂高等学校2年（京都府）

絹川 愛望

私が初めて茶道と関わりを持ってから今年で7年になる。きっと、初めて茶道部に入部した小学5年生の頃の私がこれを聞いたら驚くだろう。私は飽き性で、小学生になると同時に始めたそろばんも、友達と一緒に始めたダンスもすぐに辞めてしまった。そんな私が唯一楽しんで7年間続けているのが茶道部なのだ。

茶道部に入部したきっかけは単純で、運動ができないからだった。なにか特別な理由があったわけでもなく、嫌になったらまたすぐに辞めればいとすら思っていた。しかし、そんな考えはすぐに消えることになる。入部してから初めて見た先輩の丁寧でかっこいいお点前に、私はすごく憧れた。そして何より、他からは感じられない温かく落ち着いた雰囲気にも強く惹かれたのだ。その日から、私は先生や先輩たちにお点前を教してもらいながらたくさん稽古を重ねた。先輩たちは後輩思いで本当に優しく、お点前だけでなく、人として私の憧れになった。私はほとんど部活を休むこともなく、気づけば茶道に熱中していた。そして、中学生になって初めてできた後輩たちの存在が、新たに私が茶道を続ける理由の一つとなった。まだまだ拙い私のお点前に、後輩たちはあの時の私と同じように憧れを持ってくれたのだ。それがすごくうれしくて、私ももっと先輩たちと同じように丁寧でかっこいいお点前をしたい、後輩思いな先輩になりたいと改めて思うようになった。そこから私は後輩たちにただお点前を教えるだけでなく、空いた時間に趣味の話などをして後輩たちと積極的に仲を深めた。私を感じたあの雰囲気を、みんなにも感じてほしかったのだ。そして私は後輩たちと学年を超えた仲の良い姉妹以上の関係を築くことができ、私たちが後輩を支えるだけでなく、後輩たちもまた私たちを助けてくれた。中学生の後半はコロナ禍と重なって満足に活動できないことも多かったが、後輩たちのおかげで本当に楽しい時間を過ごすことができた。

そして私は高校生になり、初めて茶道部を辞めるかどうか悩んだ。中学校と高校で流派が違ったからである。しかし、他の流派がどんなものか知らないまま辞めるのも今までの私の思いとは違うと感じ、私は高校での部活動体験に参加した。そこで私はずっと憧れてきた中学時代の先輩と再会した。憧れてきた先輩がいて、私の大好きな茶道部ならではの雰囲気もあって、私はやっぱり茶道から離れられないと感じた。流派なんて関係なく、私は茶道そのものが大好きになっていたのだ。高校でも、優しく立派な先生や先輩たちに囲まれて、今も楽しく活動ができています。そして裏千家茶道を始めてから2年目、私にはまた後輩ができました。みんな真面目で良い子ばかりだ。この作文を書いている今はまだ3年生の先輩がいるが、これから先は私たちが後輩を支えていかなければならない。不安なことも沢山あるが、私を支えてくれた沢山の先輩たちのように頑張っていこうと思っている。

私は飽き性で、今まで長く続いた習い事などは殆どなかった。どれも中途半端に諦めてばかりだった。でも、茶道はそうじゃなかった。沢山の先輩や後輩に恵まれ、自分が本気で打ち込

めるものをやっと見つけることができた。将来のことなどは、今はまだわからないが、私を支えてくれた同級生、先輩、後輩、先生、両親に、そして始めて茶道と関わりを持った小学5年生の頃の自分に、いつか胸を張ってありがとうと言えるその日まで、私は茶道を続けていきたい。